



あらゆる 視覚資料から 情報を引き出し 文化や歴史を ひもとく

4 美術史学への誘い

神戸大学大学院人文学研究科

宮下規久朗 准教授



このコーナーでは、私たちの社会や生活に身近な研究テーマを分かりやすく紹介する。第一線で活躍なさっている研究者の研究内容を中心に、学問の仕組みや今後の可能性などについて、インタビューする。

多くの人は美術史学と聞くと、“美術の歴史を研究する”学問だと考えているのではないだろうか。しかも絵画や彫刻などのいわゆる美術作品を対象とした、極めて趣味を興じた研究だと思われがちだ。ところが、実際の美術史学の世界は、こうした一般的なイメージとはかなり異なっており、身近な、それでいて現代人にとってかなり“使える”学問なのだ。その世界の一端を紹介する。

歴史学では扱わないような 視覚資料から時代を読み解く

美術史学は、英語では「Art History」といいますが、historyには「歴史」という意味だけでなく、「物語」という意味があります。つまり美術史学とは、「美術を通して歴史を解説する、美術作品に込められた物語を読み解くこと」を目指した学問なのです。

なぜなら、そこには人間の思想や文化が表現されているからです。歴史学は今日まで残されてきた「文字資料」を使ってその時代の文化や思想を明らかにしていきます。これに対して美術史学は、歴史学が扱わないような文字のない時代や地域の文化・思想、あるいは文字があってもそこからこぼれ落ちているような情報を、具体的な美術作品という「視覚資料（イメージ）」から引き出して、その時代の文化や思想を明らかにしようというわけです。ですから、美術史学は歴史学の一分野と考えることができます。

研究対象である美術作品は、油絵や版画、彫刻など、

美術館に展示されるような芸術作品ばかりではありません。具体的に目に見えるものであれば、文字資料以外のすべての視覚資料が対象になります。考古学も同じように視覚資料を扱いますが、その研究対象が過去のものに限定されているのに対して、美術史学は過去の作品だけでなく現在の作品も扱います。ですから美術史学は考古学の対象領域を拡張したような学問であるともいえます。

研究対象は無限だが研究の方法論は確立

さて、人類がこれまでに残してきた美術作品の数は、古今東西にわたって膨大な数にのぼります。ただし、美術史学においては研究手法、すなわちイメージから情報を引き出す学問的な手続きがほぼ決まっています。その方法論をある程度マスターすれば、さまざまなジャンルに応用可能です。例えば、イタリア美術について深く掘り下げることができれば、現代日本美術も同じ目で探求することができるのです。膨大な研究範囲であっても、一定の方法論で研究することができるわけです。

その方法論は次の2つに集約できます。1つは「様式論」と呼ばれるものです。これはイメージを表現している色・形・線などの移り変わりを詳細にたどり、それを記述していく方法です。例えば仏像で



PROFILE
宮下規久朗（みやしたきくろう）
神戸大学大学院人文学研究科准教授。
1963年愛知県生まれ。東京大学文学部美術史学科卒。1989年同大学院人文学研究科修了と同時に兵庫県立近代美術館学芸員。1992年より京都現代美術館学芸員。1995年より神戸大学文学部助教授。2007年より現職。専門分野は、イタリア16～17世紀を中心とする西洋美術史、日本近代美術史。第6回鹿島美術財団賞（1999年）、第10回地中海学会ヘレンド賞（2005年）、第27回サントリー学芸賞（同）などを受賞。著書に『カラヴァッジョー聖性とヴィジョン』（名古屋大学出版会）、『食べる西洋美術史』（光文社新書）、『カラヴァッジョーへの旅』（角川選書）など。



あれば、形がふっくらとしたり細くなったり、リアルになったり抽象的になったりと、時代によって様式がさまざまに変化していきます。その様式の変化を細かくたどっていくのが様式論です。ちなみに、日本の仏像に関しては研究成果が膨大に蓄積されており、新しい仏像が見つかって、制作された年を5年間の範囲内で特定できます。

様式論を突き詰めていけば、「美術鑑定」につながります。本物か偽物かを見分ける真贋鑑定では、最近は科学鑑定の出番が増えていますが、最後はやはり人間の見る目が決め手になります。美術史学をやっていると、美術作品の価値や位置付けなどが分かるようになるのです。

もう1つは、「イコノロジー（図像解析学）」と呼ばれています。これはある作品やイメージに対して、それが制作された時代の文字資料を使って、その形の意味を読み解いていく手法です。意味がよく分からない曼陀羅が見つかったとしても、その制作年代さえ分かれば、当時使われていた教典などから、イコノロジーを使ってその曼陀羅の意味を明らかにすることができるのです。

この方法論を用いれば、文字のない時代や文字を持たない文化などが残した作品から、当時の宗教や思想などを読み取れるようになります。例えば、南米などにはかつて文字を持たない文化が栄えており、神殿などの建築物や絵、土偶などが大量に残されています。こうしたイメージに対してイコノロジーを進めていくことで、太陽信仰があったことも分かりますし、布に施された刺しゅうの柄などから、どんな理由で人身御供を行っていたのかといったことも分かってきます。イコノロジーは文字がある時代にも応用でき、文字資料の隙間を埋める情報収集にも役立っています。

美術史学の研究では、この「様式論」と「イコノロジー」の2つの方法論は共に必要です。つまり形を細かく見ることと、形の意味を追求することの両方を行うことで、対象としている美術作品を深く読み解くことができるのです。文字資料が豊富に残されている時代や地域の美術作品について研究を始め、見る目を養うことができれば、ほかの時代やジャンルの美術作品に対する見る目も養うことができます。

！ 旧知の作品に対する新たな解釈の可能性も

では私の研究を例に、具体的な研究の進め方を紹介しましょう。私はイタリア美術、とくにカラヴァッジョ^(*)

【図1】 洗礼者ヨハネの斬首



の作品を専門に研究しています。小学生のときに見た彼の最高傑作「洗礼者ヨハネの斬首」【図1】に、強い衝撃を受けたことや、殺人を犯して逃げ回りながら絵を描き、のたれ死にしたという作者自身の生き方に興味を湧いたことなどが、研究の原点になっています。

この作品は、牢屋の中庭で聖人ヨハネが首を切られているところを描いています。聖書のテーマとしてはありふれており、いろいろな作者が描いていますが、カラヴァッジョの作品には独特の迫力を感じます。そこでその意味を考えることにしたのです。

この絵が描かれたのはマルタ島で、当時は騎士団の島でした。騎士団は十字軍時代に創設されたイスラム教徒と戦う修道士たちの集団であり、日々の戦いの中で多くの修道士たちが命を落としていました。あるとき私は、この絵の中でヨハネの首を切っている処刑人のポーズが、羊を生贄として捧げる際に、羊の喉を掻き切りその血を地面に捧げるときのポーズであることに気付いたのです。そしてこの絵の中で殺される聖人は、単なる聖書の登場人物ではなく、犠牲になった騎士を象徴しているのではないかと考えた。そんな非常に政治的な意味を持った絵ではないかと考えました。もちろん、処刑人のポーズだけではなく、腰にぶら下がっている鍵や後方から覗いている2人の囚人の意味など、細かな分析も行っています。その結果、聖書の1場面を伝える絵画が多く描かれていた当時としてはめずらしく、仲間を追悼するという非常に現実的な力強いメッセージが込められていたからこそ、この絵に独特の迫力が生まれたことが分かったのです。

カラヴァッジョの代表作の1つ「聖マタイの召命」【図2】は、キリストがマタイに弟子になるように言っ

【図2】 聖マタイの召命



た場面を描いたものですが、画面右端で腕を伸ばして指さしているキリストに対して、マタイは誰かということが長い間論じられていました。従来は画面中央左寄りの、自らを指さしている初老の帽子の男性だとされてきましたが、近年になって左端でうなだれている少年がマタイではないかという大論争が起こったのです。

議論の末、現在ではマタイは少年だということに落ち着いていますが、私も少年だと確信しています。その理由として、まず、税吏であるマタイは最初から室内にいたはずですから、無帽だろうと類推できます。左端にいる無帽の2人のうち、奥の初老の男の手つきはイタリアではお金を払う手つきです。税吏は税金を受け取る側ですから、残る少年がマタイというわけです。また、この絵と連作になっている絵には、後に聖人となったマタイが描かれており、マタイが腰掛けていた椅子が、この絵の少年の腰掛けていた椅子と同じものだったことなどから、マタイはこの少年だと思われるのです。

これらの例でわかるように、いったんは評価の定まった絵についても、後世になってから新しい解釈が出てくる可能性は少なくありません。そこが美術史学の面白いところなのです。

研究スタイルとしては、1人の作家や特定の作品を深く研究したり、1つのテーマから美術作品を眺めたりする研究もあります。ほかにも、音楽、文学、舞踊、死（葬儀様式）などをテーマにして美術作品との関連性を研究し、そこに込められた意味を探ろうという研究などが考えられます。

最近私が取り組んだのは「食と美術」のテーマです。西洋絵画には日本や中国の絵画にはほとんど見られない食事のシーンが数多く登場します。これは、レオナル

ド・ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」に象徴されるように、食事がキリストの体（パン）と血（ワイン）を自分に取り入れる、神聖なものとしてとらえられていることが大きいのです。そこで、その「神聖さ」がさまざまな絵画の中でどのように扱われているのかを考察しました。

作品を見る目は“センス”より
本物に数多く触れること

最後に、美術史学を学ぶ上でぜひ覚えておいてほしいことがあります。美術作品を研究する上で、いわゆる“センス”は不要だということです。独特の鑑賞眼が必要ではないかと思われるかもしれませんが、多くのジャンルの本物に

数多く接する経験が、美術史学に必要な「作品を見る目」を養ってくれます。方法論は確立しているのですから、あとはその目を鍛える経験を積むことです。美術史学は、大学に来てからでも決して始めるのに遅すぎるということはありません。多くの人は高校までの美術の時間には、「美術史学」には触れていないと言えます。美術史学を学ぶということは、例えば、1枚の絵を見てそこからどんな情報が引き出せるのかといった訓練や、2つのポスターを並べて、どちらが、なぜ、どのように効果的なのかを考える訓練を積むということです。欧米では義務教育段階からそうした教育が行われていますが、残念ながら日本ではほとんど行われていません。

もう1つ、美術史を学ぶメリットをお伝えしましょう。美術館などの学芸員は学んだことを直接役立てることができる職業ですが、一般企業や行政に進んでも、広報や展示に関わる業務や文化行政などに関わる場合は特に力を発揮できます。美術史学を学んだ人は、画像や映像を批判的に見る訓練ができていたため、そのイメージが発信する情報の良し悪しをくみ取り、良いものを判断できる能力が身に付いています。他の人とはひと味違った視点からそれらの業務に貢献できるのです。美術史学は、人文科学系の中では比較の実務に強い学問でもあるのです。

(*)カラヴァッジョ…1571～1610年。イタリアのバロック時代を代表する画家。本名は、ミケランジェロ・メリージ。聖書をテーマに強烈な印象を残す作品を発表する画家として名声を得るも、喧嘩が原因で殺人を冒し、殺人犯として逃亡。逃亡先のマルタ島で「洗礼者ヨハネの斬首」を描いて認められるが、再び事件を起こし投獄されるなど、劇的な生涯を生きた。